
向日葵。

きみ唄。

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

向日葵。

【Nコード】

N97570

【作者名】

きみ唄。

【あらすじ】

不思議な力を持った少年と、病気の少女。

病気の少女に会った少年が成長していき、最後に大切なものを見つける話です。

向日葵が咲き始める季節。僕はいつもどおりに、友達のお見舞いに行っていた。

「お前、進路は決まったのか？」

たまに聞かれる、将来のこと。僕はやりたいことなんてとくになく、ただなんとなくすごしているだけ。

ただ、僕は他の人ができないことが出来る。
科学的にはありえないが、つぼみや葉から、花を咲かせることができる。

……もう、こんな力なんて使いたくない。

そう思いながら、病室から出て帰ろうとしていた。その帰り道、ドアの開いている病室にふと目がつく。

中には、1人の少女がいた。少女は窓の外を眺めている。その横顔は、とても消えそうなくらいはかなかった。

「何を見ているの？」

僕は、つい声をかけてしまった。少女は驚きながら、僕を見て笑いながら言う。

「向日葵を、見ていたの」

「向日葵？」

「ええ、そう。私、向日葵が大好きなの。強くて、大きくて、太陽に向かってまっすぐに伸びてる。私は向日葵のように強くなりたい

なあ……」

そういう彼女の病室からは、咲いていない向日葵が見えた。

彼女は思い病気で入院しているらしい。話を聞くと、あと少しで手術があるそうだ。

彼女の話聞いているうちに、僕は彼女にどんどんひかれていくのを感じた。

出会ったあの日に、彼女はこう言っていた。

「私、ここから出られないの」

「……どうということ？」

彼女は、この病室から出られない。彼女の病室のドアは、透明なビニールでおおわれている。

重度の白血病で、外の細菌が体の中に入ってしまつと死んでしまうという病気だった。

病室は個人部屋で、本だなが1つあるくらいのさみしい部屋。なのに、彼女は必死に生きようとしていた。

そんな彼女に比べて、僕は何をしているのだろう。

花を咲かせる力とはつくの昔に止めてしまった。あの力は、僕には重すぎたんだ。

「ねえ、知ってる？ 向日葵の花言葉は、あこがれや愛をさすんだって。それにね、向日葵の由来は太陽の動きにつられて、その方向を追うようにして花が回るからなんだよ」

「へえ。花言葉が愛だなんて初めて知ったよ。夏にプロポーズするときは、向日葵がいいのかなあ」

「……誰かに告白、するの？」

「まさか！ ただの例えだよ」

こうして毎日のように友達のお見舞いの歸りに、彼女の病室によつていった。

日をおうごとに彼女のことをよく知っていく。それと同時に、もつと知りたくなつた。

彼女は、日に日にやつれていく。

それでも彼女の生きようとする力強い目だけは変わっていないかつた。僕と彼女の違うところは、目標に向かって頑張り続けていること。

（変わりたい……）

彼女ということで、ある日僕はそう思った。

力を使うことで、何かが変わるのだろうか……？

少しの可能性を信じて、いつ使ったかなんて覚えていないこの力を、使ってみることにした。

家にあつた、チューリップのつぼみ。それを持ち、僕は願つた。

（咲け、咲け、咲け）

……花はつぼみのままで変わらない。こんなことは初めてだつた。

「何でだよ！？」

何度願つても、となえても。チューリップはつぼみのまま、何も変わらなかった。

（何で……？）

僕はわけが分からず、その場に座り込んだ。
今までは、普通にすぐに咲かせることができたはずだ。混乱している、

プルルル、プルルル、

電話がなった。僕は混乱したまま、受話器をとった。

かかってきたのは、彼女の母親からだ。頭が一気に冷えていくのを感じた。

電話の内容は、僕が恐れていたことだった。

「容態が、急変した……？」

受話器からは、彼女の母親のすすり泣く声と、さわがしい周りの音がしていた。

「あなたを呼んでいるの……。お願い。来てあげて」

僕は電話を放り投げてすぐに病院へ向かった。

彼女は、体中を管につながれていた。苦しそうにして、僕を呼んでいる。

「もう、時間がないみたいなの。手術は明日になるみたい……。お願い、手術が終わるまでは、一緒にいてくれない？」

心臓がキュツとしめつけられるような感覚におちいった。

「僕は、ずっと君を見ているから。どこに居ても、必ず」
彼女は泣きそうな顔をして、僕を見ていた。

次の日、僕は眠れずにずっと彼女のことだけを考えていた。
僕が彼女に出来ることはなんだ。……いや、分かっているはず。
僕は彼女のために、精一杯の、出来るだけの応援をするしかないんだ。

そう思い立った僕はすぐさま、病院の窓から見える向日葵畑に向かって走っていた。
時間がない。病院に行くまでに、自転車を倒したことも、誰かにぶつかったことなんかも、まったく気がつかなかった。

向日葵畑が見えてきた。腕時計を見る。

あと十分

向日葵は、咲いていない。僕は向日葵に向かい、大きく手を広げて彼女のことだけを考えた。
そして、叫んだ。

「大きくなれ、大きくなれ、大きくなれ、大きくなれ、大きくなれ
！」

声が枯れることなんて気にせず、汗をぬぐうこともせず、ひたすら
願い、叫んだ。

向日葵は徐々に、伸びていく。

向日葵はくきを伸ばして、ぐんぐん大きくなっていった。僕は気
分が好調して、さらに叫ぶ。

「大きくなれ、大きくなれ、大きくなれ大きくなれ大きくなれええ
えええっ！！！」

向日葵を見ると、それは僕の身長をこしてとても大きくなっていた。
何分たったか分からない。僕はそれくらい、時間を長く感じた。
息を切らせながら、僕は彼女の居る窓を見上げた。

彼女は驚きと喜びの混ざった顔をして、僕を見つめていた。彼女は
外の空気を吸ってはいけなはずなのに、窓を開けて身を乗り出
していた。

後ろからあわてて母親が止めている。そんな母親のことを彼女は
気にしていないようで、僕に向かって叫んだ。

「私、頑張る！　頑張るから……っ、本当に、ありがとう！」

彼女は泣きそうな顔で、きれいに強く笑った。

向日葵が一面に咲いている例のところに、僕と彼女はいた。

「手術、成功してよかったね」

「君のおかげだよ。この向日葵を咲かせてくれたのは、君なんだから」

僕はクスクス、と笑って手をつないだ。

「僕、忘れていたんだ」

「え？」

「この力、ずっと使っていなかったんだ。……昔は、皆が喜んでくれるから咲かせていたんだよ。でも、小学校に入ってから気味が悪いって言われちゃってさ」

彼女は僕の目を見つめて、真剣に話を聞いてくれている。

そのことに安心して、僕は話を進めた。

「たぶんね。この僕の花を咲かせる力は、誰かのために使おうと思うことで発揮されるんだと思う。……忘れていた。これを思い出させてくれたのは、君だよ。」

「……ありがとう」

彼女は笑う。
僕も、笑う。

彼女のおかげで、僕は誰かのために必死になることを知った。
…僕は、何か変わったかな。
僕の手が強くにぎられた。僕も、にぎり返した。

僕は向日葵のように、強く根をはって、大きく君を見守っていき
たい。

向日葵の花言葉を教えてくれたのは、君だってことを忘れないで。

病院にいた友達にいつも聞かれる、進路のこと。今はまだ決まっ
ていないけど、やりたいことは見つけたんだ。

向日葵も、空も、君も。

昔の僕が見ていたころよりも、とてもきれいに、輝いているかの
ように見えた。

（後書き）

文才はまったくないです。ごめんなさい。（泣

少年の気持ちと、気持ちの変化に気がついてくれたら嬉しいです。
大切なものや、必死になれるものができたらいいなあと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9757o/>

向日葵。

2010年11月18日01時01分発行